

第9回吉野作造研究賞の選考結果

〈講評〉

吉野作造記念館では吉野作造が終生後進の育成に取り組んだことに鑑み、吉野作造研究賞を設け、若手研究者の育成と吉野の精神の継承、吉野研究の裾野拡大に取り組んでいる。

第9回吉野作造研究賞は、2024年4月発行の『吉野作造研究』第20号に募集要項を掲載したほか、関連分野の学会等に案内を送付、またインターネット上で募集告知を行った。応募資格は2024年4月1日時点で40歳以下の者とし、応募作品については政治史、政治思想史、文化史などを主題とした未発表のものか、2022年4月1日から2024年3月31日までに刊行された著作、研究論文を対象とした。

今回の応募は8点であり、審査会による慎重な選考の結果、以下の通り表彰を行うものとした。

〔最優秀賞〕

該当作なし

〔優秀賞〕

土田千愛『日本の難民保護—出入国管理政策の戦後史』（慶應義塾大学出版会、2024年）

〔新人賞〕

藤川剛司「民に代わり議するために—中江兆民と代議制民主主義」（『国家学会雑誌』136巻11・12号、2023年）

優秀賞の土田千愛氏は東京大学大学院総合文化研究科で特任助教（所属・職名は応募時のもの—以下同）を務めている。受賞作『日本の難民保護—出入国管理政策の戦後史』は、難民保護政策という極めて今日的なテーマについて、戦後の長い期間を対象に着実に整理・議論している点が評価された。また、主として法制度論中心の研究でありつつ、法学ばかりでなく政治学的なアプローチをとろうとした点も評価の理由となった。

新人賞の藤川剛司氏は東京大学大学院法学政治学研究科博士課程に在学中である。受賞作「民に代わり議するために—中江兆民と代議制民主主義」は、世界の代議制・代表制をめぐる理論的研究をよく踏まえ、そこからさらに中江兆民や明治期日本の代議制について考察するものである。現代のシティズンシップ論まで射程に含み得るような、代表制とは何かという問題に対する透徹した視点を持つ意欲作であった点が評価された。

なお、最優秀賞は該当作なしとなったが、いずれの応募作も興味深い内容を含む力作であった。今後本賞に応募を検討している若手研究者にも意欲作の投稿を期待したい。各受賞者およびすべての応募者の今後の活躍を期待する。

審査委員会 委員長 宇野 重規（東京大学社会科学研究所教授）

同 委員 松田宏一郎（立教大学法学部教授）

同 委員 清水唯一朗（慶應義塾大学総合政策学部教授）